

2017年10月11日

トップコーチ・スポーツフォーラム 報告書

【概要】

主催：神戸ウイングスタジアム株式会社
主管：NPO法人SCIX
(特定非営利活動法人スポーツ・コミュニティ・アンド・インテリジェンス機構)

後援：神戸市教育委員会、神戸市スポーツ教育協会、兵庫県ラグビー協会、
関西ラグビーフットボール協会、兵庫県サッカー協会、
関西学生アメリカンフットボール連盟

開催日時：2017年10月8日(日)15時30分～17時

場所：ノエビアスタジアム研修室

テーマ：「2019ラグビーW杯“神戸らしい大会”を、みんなで考えよう！」

出演者：◎パネリスト

増保輝則氏(神戸製鋼コベルコスティーラーズ アドバイザー)
伊藤鐘史氏(神戸製鋼コベルコスティーラーズ所属)
長村博氏(神戸市教育委員会事務局 ラグビーW杯事業推進担当課長)
平尾剛氏(神戸親和女子大学准教授)
加藤寛氏(神戸スポーツアカデミー代表・SCIX理事)

◎司会

SCIX理事 美齊津二郎氏

参加者：指導者 保護者等 約40名

趣旨：この11月2日(2年後の本大会決勝日)には、本大会全48試合(プール戦40試合・決勝トーナメント8試合)の試合日程など概要が発表される2019ラグビーW杯。果たして神戸ではどんなゲームが、何試合組まれるのか、発表が待ち遠しい。そのW杯神戸開催を素晴らしい大会にするために、私たちに何ができるか。大会を華やかに盛り上げ、世界から訪れるラグビーファンに「KOBEらしい大会だった！」と喜んでもらうために、どんな準備、大会運営、おもてなしが必要なのか、W杯をよく知る出演者の皆さんと議論し、アイデアを出し合いながら「神戸らしい大会とは何か」を、私たちのメッセージとして発信する。

内 容 :

フットボール・コーチングセミナー29・第2部は「トップコーチ・スポーツフォーラム」と題した、指導者対象のトークイベント。

「2019ラグビーW杯“神戸らしい大会”を、みんなで考えよう！」をテーマに、元ラグビー日本代表の増保輝則氏・平尾剛氏、2015イングランド大会でも活躍したコベルコスティーラーズの伊藤鐘史選手、神戸市からRWC事業推進担当の長村博氏、「2002サッカーW杯日韓大会」に携わった加藤寛氏（SCIX理事）らをパネラーに迎え、2年後に開催されるRWCを市民全体でどう盛り上げ、神戸らしい魅力溢れた大会にするか、それぞれの立場から熱い言葉で語っていただきました。



まず、第2部司会進行担当のSCIX理事・美齊津氏よりパネラー陣の紹介がされ、はじめに神戸市RWC事業推進担当の長村氏から当面のスケジュールについて説明がありました。10月22日に開催されるコベルコスティーラーズのイベント翌日から、ノエビアスタジアム神戸が改修工事に入り、2018年2月に日本唯一のハイブリッドスタジアムとしてリニューアルオープンし、ヴェissel神戸の試合で初お披露目される旨が明かされました。さらに、2019RWCは、自治体任せではなく市民が自主的に協力していく必要があると述べ、受講者にも協力を呼びかけました。

続いて話題はパネラー陣のW杯体験について。

現在コベルコスティーラーズのアドバイザーであり、2019RWCアンバサダーにも就任し、現役時代は日本代表として3度のW杯を経験している増保氏は、W杯を「本気で戦う大会」と称します。

それを受けて、先の2015RWCイングランド大会でも活躍をした伊藤鐘史選手は「W杯で勝つことの大変さ」について、こう言います。「エディージャパンの4年間は、これまでのラグビー人生で一番必死に取り組んだ。これで勝てなければ一生勝てないだろうというくらい」。RWCがどれほど特別な大会であるのかが、お二方の言葉からも伺い知れます。

現在、神戸親和女子大学で助教授として教鞭をふるい、ラグビー日本代表としてW杯出場経験もある平尾氏は、選手時代の経験もふまえつつ、神戸で開催される2019RWCをイベントとしてどう盛り上げるのか？ という観点で見ていると話します。

同じく、神戸親和女子大学教授であり、長年サッカー指導者として普及育成に従事し、2002サッカー日韓W杯を盛り上げた立役者の一人でもある加藤氏は、「サッカーとラグビーは“フットボール”という点では兄弟のようなもの。ぜひ応援したい。2019RWCによって、ラグビーを観たことのない人にも、ラグビーの素晴らしさや、スポーツの良さが伝えられるイベントになれば」と期待を込めてのコメント。

「では、具体的にはどのような企画、活動をしていくのか？」という点に話は移行。

「2018 サッカーW杯終了を機に、一気にラグビー熱を高めたい。KRF Cのパブリックビューイングなども活用しながらアナウンスしていく。ひとりひとりがアンバサダーになったつもりで2019RWCを広めて応援してもらいたい」と増保氏が展望を語ります。

伊藤選手は、2019RWCは、ラグビーの伝統国で開催されてきたこれまでのRWCとは違い、初の新興国での開催となることから集客が鍵を握るだろうと指摘。さらに、プレーする選手の立場としても、大勢の観客によりモチベーションがアップすると集客の重要性を訴え、そのためには街全体での雰囲気づくりが必要ではないかと提案。

一方、長村氏からは、2019RWC観客動員については、2018 サッカーW杯前からの取り組みとして、日本国内でのトップリーグの盛り上がり、観客増員が必至ではないかと発言。

これに対し、増保氏もトップリーグのレベルアップ、代表チームの強化はもちろんのこと、ラグビーの面白さを伝える工夫をしていきたいと意欲を表しました。



ここで、長きに渡りサッカー界に身を置く加藤氏から、「ラグビーの魅力」に話が及びます。加藤氏は「国籍の枠を越えた、進んでいる競技」と、ラグビーを評しました。日本代表選手はもとより、応援の仕方についてもしかりと。

平尾氏も同意し、これに続けます。国籍含め、ラグビー独特の文化について語り継ぐ語り部のような存在が増えること、そのような機会を増やすこともラグビー人気、集客に繋がるだろうと。

加藤氏からは、さらなる具体策として、先のW杯出場の日本代表選手が、編集動画を引っ提げ、小学校を廻り体験談を語り歩くことを提案。妙案とパネリストがメモをとる場面も見られました。

また、伊藤選手の実体験として「かつては、自身でも観客増員のための草の根運動として、飲み会をセッティングし、友達に友達に観に来てもらうということも行っていた」のだとか。SNSなどの活用もさることながら、小学校行脚しかり、「知っている選手は応援したくなる」という心理をついた、face to faceの繋がり大切さについても提唱しました。

さらに、伊藤選手が先のW杯でイングランドを訪れた際に、ダンスショーなどの歓待を受け、率直に嬉しかったと、おもてなしの心やセレモニーなどの意義について語りました。

それを受け、平尾氏からは、小学生が、来日したチームの選手をおもてなしすることにより、その国の存在や、その国のことを知るきっかけとなり、交流することの大切さを学べる機会にもなるだろうと持論を展開。

長村氏は選手のみならず、世界から押し寄せる観客にも、おもてなしの必要性があると強調し、増保氏は、滞在期間が長いので、食含め、神戸らしい体験、神戸の素晴らしさを訴求したいと語りました。

最後は、「神戸開催の意義、レガシーは？」について。

始めに説明のあった、ハイブリッドスタジアムとしてリニューアルオープンするノエビアスタジアム神戸がハードのレガシーとなるのに対し、ラグビーの競技人口が増え、部活数が増えることがソフトのレガシーと言えるかもしれないと長村氏。

さらに、ブームを一過性のものにしないためにも、ラグビーの楽しさを伝え、丁寧な指導が受けられる受け皿として、SCIXのようなクラブチームの設立、増設が必要と平尾氏が提案しました。

パネリスト唯一の現役選手である伊藤選手は、「W杯を機に、学校のグラウンドにラグビーポストが立つようになるといいな！ 体育の選択肢の一つとしてラグビーが選ばれるようになると嬉しいな！ ラグビーを辞めた後も子連れでラグビー観戦に行く！ という世の中になればいいな！」と想いを語りました。



2019RWCを大成功といえる大会にするために、さらには、日本のラグビー、スポーツ文化発展に繋がる大会とするために、SCIXも尽力できればと思っています。

神戸、いや、兵庫、いや、日本全体で大会を盛り上げて行きましょう！

今回も沢山のご参加ありがとうございました。

以 上